

研究タイトル：

出版文化を基軸とした近世絵本の総合的研究



氏名：	古明地 樹 / Komeiji Tatsuki	E-mail：	Komeiji-t@kagawa.kosen-ac.jp
職名：	助教	学位：	博士(文学)
所属学会・協会：	国際浮世絵学会,近世文学会,全国大学国語国文学会		

キーワード： 絵本,浮世絵,絵手本,画譜,絵入本,出版文化,画題

技術相談

提供可能技術：

- ・浮世絵や版本を用いた江戸時代文化に関する講座
- ・古典籍資料(古文書)の調査や指導
- ・くずし字読解に関する講座
- ・江戸時代の出版文化に関する講座

研究内容： 近世絵本史を編む

浮世絵に代表されるように、近世期は日本の視覚文化が大きく発展を遂げた時代である。庶民にまで絵の享受者層が拡大したこと、その享受者層が高い絵画的教養を備えていたことが、近世期の視覚文化を飛躍的に発展させたと言える。

この教養の涵養に大きな役割を果たしたものが近世絵本であった。近世における「絵本」とは、本来〈絵の手本〉を意味する言葉であり、後に〈絵を主体とした書物全般〉を意味するようになった語である。印刷技術の飛躍的な向上により、絵本は江戸時代に大量に制作され広まり、確認される作品は1000を超える。浮世絵師や町絵師らは、このような絵本を用いて絵の描き方を学び、絵を描かない庶民層の人々も絵に対する知識を得る材料として絵本を用いた。即ち近世絵本の出版流行は、絵の制作者と享受者の両者に知識を与え、近世における視覚文化の基盤形成に大きく影響することになる。

現在、浮世絵に代表される近世期の視覚文化は世界的な評価を受け、現代における多様な文芸作品に及ぼす影響は大きい。そのような近世期の視覚文化の実態を解明するためには、その基礎を形成した近世絵本の研究が求められる。この考えに基づき、書誌学的資料調査に基づく絵手本・画譜の実証的研究を行い、近世における絵本出版の実態を解明する。これにより、〈近世絵本史〉を編むことを目指す。



架蔵 橘守国画『運筆叢画』寛延2年(1749)刊

提供可能な設備・機器：

名称・型番(メーカー)	